

地域子育て支援拠点研修事業〈東京開催〉

<開催概要>

- 開催日 平成23年1月30日(日) 10:00~16:30
- 会場 東京ウィメンズプラザ
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・東京都・子育て応援とうきょう会議
- 協力 NPO法人せたがや子育てネット
- 参加者数 189名(行政25名 NPO/任意団体94名 その他団体/企業29名 その他41名)

<開催挨拶> 10:00~10:10

- 主催者挨拶 財団法人こども未来財団 研修事業部長 前中寛之さん



- 開会挨拶 NPO法人せたがや子育てネット 代表理事 松田妙子さん



○プログラム1 基調報告 10:10~10:40

『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

講師 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室
計画係長 國松弘平さん

地域子育て支援事業の概要と位置づけ、実施状況、また、国の施策や動向についてデータに基づき具体的な説明がありました。基本方針は、子育てを社会全体でささえること、利用者本位であること、地域主権を前提にすべての子育て家庭に必要なものを提供していくこと、政府の推進体制を一元化することの4つです。また、子育て支援を巡る最近の動きとして、「子ども・子育て新システム」についての説明があり、新システム実現に向けて政府の推進体制と合わせて財源を束ねて行くことや社会全体で費用負担をし、地域主権のために、基礎自治体を重視していること。また、幼保一体化などにより、多様な保育サービスを提供、ワーク・ライフ・バランスの実現を目指すことなどを図解で説明されました。



○プログラム2 基調講演 10:45~12:00

『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について』

講師 日本福祉大学教授 渡辺顕一郎さん

渡辺先生より、「地域子育て支援拠点事業における活動の指標<ガイドライン>」を参照しながら説明がありました。「ガイドライン」は地域子育て支援拠点事業が多様になっていく中で、利用者主体の視点に立って、支援の質の標準化を目指し、実践の核となり活用されていくために設けられたとのことでした。支援者はこれからの時代それぞれの地域で、子育てに何を求められているのか、何が必要なのかを把握し、地域をつなぐ役割を担っていかねばならないとのことでした。地域子育て支援拠点は場を提供するだけでなく交流を促すスタッフの工夫が必要です。また、利用者同士が話し合うことで解決する悩みも多いことから、支え合う関係づくりも大切です。お互いに子ども同士のかかわりを見守るとともに、地域の大人とのかかわりができる環境づくりに努め、支援者は利用者の気持ちに寄り添い、対等な関係で、地域子育て支援を行っていくことが望ましいとのことでした。



○プログラム3 分科会 13:00~15:30

◆ 第1分科会『皆が過ごしやすい居心地のよい拠点づくりのために』

コーディネーター：NPO 法人びーのびーの 理事長 奥山千鶴子さん

事例報告：NPO 法人野沢3丁目遊び場づくりの会

のざわテッターひろば プレーリーダー 野下 健さん

：風の谷保育園さかえ・こどもセンター 主任 甲斐恵美さん

①事例報告

皆が過ごしやすいという「みんな」とはだれか？知らず知らずに、利用者が同質化し、スタッフにとって来てほしいと思っているような人だけが集まってくる場になっていないか？「親にとって」「子どもにとって」両方の視点で「みんな」が過ごしやすい「居心地のよい」場づくりについて、気づいたことをキーワードで拾いながら、事例を聞きました。



●NPO 法人びーのびーの(奥山さん)

「おやこの広場びーのびーの」は2000年4月、商店街の空き店舗を借り上げて子育て当事者で立ち上げた場。商店街の方とも温かい関係で外から見守ってくださっています。「どの子がどのお母さんの子かわからない」ほど、お互い様の見守りあいが出来ているそうです。また、「港北区地域子育て支援拠点どろっぷ」は、港北区の委託事業として2006年より運営している一戸建てのひろば。広い空間を可動式の家具などで区切り、子どもの様子を見ながら自由にレイアウト変更するなど工夫されています。庭にはパパたち手作りの砂場もあり、ベランダから外遊びをしている大きい子たちを通して、少し先の育ちを感じることもできます。また、親たちのサークルもいくつか立ち上がり、一緒にいることで人の輪が広がる場になっているそうです。



●のざわテッターひろば(野下さん)

マンション建設計画に反対した地域住民が敷地を買い上げ、子どもが遊ぶような場にしたいとボランティアセンターに相談、冒険遊び場づくり協会に繋がって立ち上がったそうです。「ともに」の関係で皆がそだてる場にする工夫を重ね、育児中の方やおばあちゃんたちなど48名のボランティアスタッフが関わり、多世代で運営されています。



地域とのつながりの「顔」である入り口を外への発信としてうまく工夫。道路からもチラシなどの情報が手に入れられるようにしたり、子どもが遊ぶスペース、親がゆっくりするスペース 中間のスペースを設けるなどスペースも工夫。大人も子どもも、自分たちが居心地よく、その時々交流しやすいような空間を心がけています。「おもちゃをあえて片付けない」なども工夫の一つ。ちゃんと片付ける前に、ちゃんと遊ぶことが大事ということを場から発信されています。また、利用者が他の人につながる機会を奪わないように、あえてスタッフが誰か分からないようにしているそうです。

スタッフの運営会議の記録も貼りだし、どんなことが話合われているのかが見えるようにしてあります。それをみると、「私も何か力になれるかも」という発想が生まれ、循環が生まれていきます。誰が来てもオープンな場づくりを心掛け、上手にまきこんでいる様子がうかがえました。

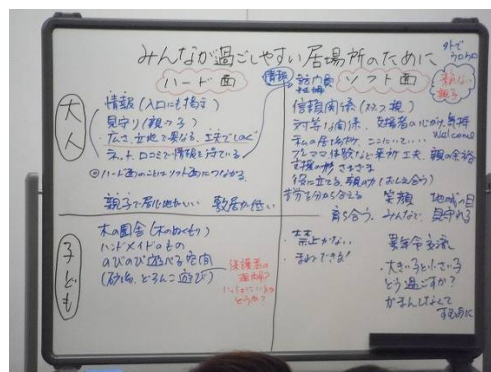
●風の谷保育園さかえ・こどもセンター(甲斐さん)

保育園が運営するセンターで、病後児、一時保育もしています。園舎や空間は、こだわりのあるとても素敵なセンターです。園庭では、園児と自由に関わることができます。その時は一緒に遊べなくても、後で園児の遊びをまねたり、0～6歳までの園児の存在はとても大きいそうです。ウッドデッキや園児のお父さんたちとともに作ったピオトープもあり、冬でも外遊びが盛ん。水もいつでも使え、思いきり遊びこむことができる場所です。一人ひとりを受け止めることを心がけ、「よくきたね」と伝えている。大切にしていることは、来ている人が、他の人の事を考える、ちょっと力になる、支え合うという場になること。色々なニーズがある中で、そのニーズに向き合うこと。保育士や栄養士、看護師などスタッフの専門性を求めてくる人もおり、その人たちを安心させてあげることができるのは保育園の良さ。園庭や遊具、手遊び、伝承遊び、生活の力、給食の力、遊びこむ力、子ども同士の力。保育園で子育て支援をしている意味を大事にとらえ、保育園だからこそできる支援を行っていることが伝わってきました。



●グループワーク

ハード面の工夫と、ソフト面の工夫、大人にとって、こどもにとって、両方にとって・・・と視点を明確にしなが、「居心地のいい場所」について話し合いました。ハード面は特性や地域性によるが、支援者の心持ちで居心地のいい場所づくりは可能であり、具体的なヒントを得ることができました。支援の形は色々あるということのを忘れないこと、大人と子どもと一緒に過ごせ、子どもの楽しい笑顔を見ながら居心地よく過ごせる場所。それが拠点づくりの基本であり、視野を広げて日々改善しながら、時には利用者の声や他の人の新鮮な目でひろばを眺めてみることも必要。ということを確認しました。



◆ 第2分科会『子育てを育み結ぶ拠点作り』

コーディネーター：NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事 松田妙子さん

事例報告：NPO 法人子育てひろばほわほわ 理事長 駒野光枝さん

荒川区社会福祉協議会 鈴木訪子さん

①事例報告

駒野さんからは、松戸市で運営している二つのひろばの特徴やそれに合わせた子育て支援や地域とのつながりのエピソード、うまくつながっていく工夫などについてご紹介いただきました。何もないところから、この指とまれと呼びかけ、仲間をつくって始め、だんだんと浸食するように地縁血縁の地域社会と馴染んでいったそうです。課題が見えても、すぐにアイデアを実行できることばかりではないため、「いつか、と思って」ストックしておく、活かせる時がくる。個人ではなかなか地域とつながりにくい、という子育て世代の課題を、アプローチ方法を工夫しながら取り組み、拠点まるごとでつながっていく様子が伺えました。



鈴木さんからは、「幸福が実感できるまち」をめざして、荒川区社会福祉協議会が地域のなかでさまざまな人材や資源を発掘し、つなぎ、時には開発している手法を学びました。鈴木さんの「技」のすごいところは、自分で直接やらないこと。誰かと誰かをつないでそこに「居場所」をつくったり、つぶやきを「ニーズ」ととらえ直して解決策を探っていくといったやり方です。まさに「目のつけどころ」といったところですが、そのポイントは「いつもキョロキョロしている」ことだそうです。また、敷居を低く、いつでも立ち寄って気軽に話ができる場を持ち（井戸端会議の「井戸」）、さまざまなニーズをとらえること、現在進行形で変化していくことに柔軟に感応できることを心がけているそうです。まさに、地域子育て支援拠点こそがその役割を果たせる、と確信しました。



②ワーク

ワークでは、まずお二人の話をきいての質問や感想などを出し合いながら自己紹介。キーワードと今後実施してみたいこと、課題など、テーマをひとつ決めて話し合い、各グループで深めてもらいました。

話し合ったテーマ

- ひろばと他機関とのネットワークづくり
- ひろばのためにどんな人のどんな力を借りるか？
- 地域を軸にしたプレママ、赤ちゃん支援のしかた
- ひろばにパパをどう巻き込んでいくのか？
- 利用者をまきこんでいく拠点づくりのアイデア
- 多世代が関わる地域の拠点にしていくには？



○ひろば拠点での一時あずかりについて

③まとめ

駒野さんと鈴木さんから、各グループ発表を聞いて、つながりづくりの極意を示していただきました。

・ひろばを知らない人、関係ない人をまきこみ、つなぐことが、まちづくりにつながる。子どもにとって、たくさんの大人、スタッフと違う人と関わることも大事。その環境をつくっていくことが必要。

・地域のキーパーソンは誰か？を探るよう、普段から心がけている。

・子育て中の親たちが、まず、拠点に自分で(自分の意思で)来ている、ということそのものを評価する。(来てくれてありがとう、という気持ちで接する)

・拠点で拾える声、パパママの声は、市民の声でもある。上手に拾って、届ける役割もその拠点にある。

・出前、訪問などで、活動を拠点の外にも広げていく。

・拠点全体で取り組んでいけるよう、個人で抱えないようにする。

・お父さんをひっぱりだすには、来やすい日程、時間帯を工夫。最初は夫婦で来てもらうなどして、徐々に慣れてもらう。

・一時預かりは、預ける親のチェックになりがち。赤ちゃんの立場からみることも大事。みんなに抱っこされて育つ大切さに気付く。(私たちが信頼して預けてくれてありがとう、という気持ち)

・利用者のためになっているか？自分たちのための取り組みになってしまっていないか？たえずその視点から事業を振り返る

・スタッフも、受け入れられている、という体験が必要。

・究極は、まちの普通のおばさんになること。誰がスタッフかわからないくらいに！

コーディネーターの松田さんからは、答えを見つけようとするより、どういう「問い」をたてるか、が重要で、その問いにむかってみんなであれこれやってみることが大事なのでは？ぜひ拠点に持ち帰って考え続けること、話し合うことを続けてほしいというコメントがありました。



◆ 第3分科会『拠点スタッフの役割・スタッフに求められる力』

コーディネーター：NPO 法人マミーズ・ネット 理事長 中條美奈子さん

事例報告：ねりま遊び子どもネットワーク 代表 中川奈緒美さん

ゆったりーの運営委員会 西 美知子さん

① 事例報告

中川さんはプレーパークをお家でという取り組みを報告されました。0歳から仲間ができて、みんなで育てるような室内広場を作りたいとのことでした。西さんはみんなで作るみんなの場所に、ほんとうの仲間になれるきっかけづくりをスタッフが心がけていることを報告しました。



② グループワーク

テーマは、それぞれの拠点で「大切にしていること」「気をつけていること」。各自が事例発表を参考にしながら日ごろの活動を振り返り、ポストイットに記入しました。自己紹介後、模造紙に貼り出しながら共有しました。張り出されたポストイットは内容毎にグループわけし、タイトルをつけてまとめました。各グループのポストイットの内容毎のタイトルとして多くあげられていたのが、「スタッフのコミュニケーション」「笑顔」など。また「スタッフの情報交換」「スタッフの心がまえ」「ミーティング」などがあげられました。



どちらの事例発表者も、親子を温かく迎え、親子の様子を肯定的に捉えていくことの大切さを話されていました。そのためにも日々のふりかえりを行なうことが必要であること、交替勤務があるスタッフ間の連絡を綿密にするための具体的な方法なども報告されました。また、スタッフ自身がよい状態でないとこのような対応は難しく、スタッフも自己肯定感が高い状態でいられるとよいのではという話もできました。

○プログラム4 全体会（分科会総括・ディスカッション） 15:40～16:25

コーディネーター：駒沢女子短期大学 教授 福川須美さん

第一分科会報告：NPO 法人びーのびーの 理事長 奥山千鶴子さん

第二分科会報告：NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事 松田妙子さん

第三分科会報告：NPO 法人マミーズ・ネット 理事長 中條美奈子さん

コーディネーターの福川さんからは、「第一分科会は、『居心地のよい居場所』、第二分科会は『地域とのネットワーク』、第三分科会は『スタッフとしての力量』がテーマだったと思う。子育て支援とは、見守りと優しさ、沢山の関わりづくり、社会づくりということ。様々な人が関わって子育てしていく中で子どもは人間になっていく。関わることで、関わる人もパワーをもらえる、素晴らしい営み。そういう視点で子育て支援事業をおこなうことが必要だと思う。」と述べられました。



●第一分科会報告 奥山さんより

みんなが過ごしやすいひろば、居心地のいい場所について話し合いました。商店街の中にある当事者参画のひろば、外遊び重視の地域のひろば、保育園が運営しているひろばなど、それぞれ個性あふれるひろばでの取り組みを通して、空間設定の大切さ、入口の敷居を下げること、活動に関する情報掲示など、地域に開いてみせていくこと、まきこむ工夫など、沢山のヒントをいただきました。「地域とつないでいく」役割がひろばにはあります。また、ハードを整えることは、ソフトにもつながっていくという視点もできました。



居心地の良い場所であれば、信頼関係も自然に育まれる。それをどう構築していくか。

親の力や子どもの力信じ、先回りせず、ある程度設定した中で力が発揮されることを信じて関わっていくことが大切、というご報告いただきました。

●第二分科会報告 松田さんより

「地域」をテーマに「子育てをはぐくむ結ぶ拠点づくり」について話しました。事例報告のお2人をお願いしていたことは、「なんでそれをやっているの？」という”下心”の部分。どんな人たちをどうつないでいくと拠点が豊かになっていくのかということをお話いただき、その後出てきた課題やキーワードを一つ選んで、みんなで作戦会議をしました。一時預かりの課題、多世代交流への仕掛け、パパママをエンパワメントしていくためにどうしたらいいか、高齢者の人たちとつながっていくこと、地縁血縁の昔ながらのネットワークとつながっていくにはどうしたらいいか？ということについて話しあい、色々な意見がでました。



- ・拠点を取り巻いている多様な人たち、「関係ない、よくわからない、知らない」という人とつながっていくことに、スタッフ一人ひとりが心を砕いて行くこと。いろんな人を巻き込むといいことがある、と信じること。リーダーや施設長だけではなくスタッフも外の人たちに出会っていくことが必要
- ・ママの声は市民の声。ひろばの中での声を外に伝える役割もあるのではないかな。
- ・子どもも大人も、沢山の大人が必要だということをもう一度確認する
- ・拠点から地域に目を向けると、訪問も大事
- ・誰かのせい、なにかのせいにしない
- ・一口大に切って(やりやすい形、分かりやすい形にして)取り組んでみる。

●第三分科会報告 中條さんより

「ねりま遊び子どもネットワーク」の中川さんからの事例では、先輩ママがスタッフになるために実施している研修のお話を伺いました。家庭それぞれの価値観を大事にし、たとえスタッフの持つ価値観が一般的に素晴らしいものであっても押し付けないことを大切にしているとのことでした。またひろばや利用者に、いろんな人が関わることを大事にしておりいろんな専門機関と関わっているということでした。「ゆったりーの」の西さんには、地元の人が集まって立ち上げたひろばであり、スタッフも親子もかわりの中で共に育っていく場であるということをお話いただきました。どちらも、利用者が望んでいることを見極め反応を見ながら対応していくスキル、いわば「職人芸」ともいえるものを、スタッフ皆が共有できるように工夫しておられました。ワークの中で、各ひろばが大事にしていることには、地域ニーズにもよって変わり、共通点や違いがあることがわかりました。いずれにしろ地域資源の色々な人、専門家と連携しながら、つないでいく力がはどのひろばにも必要だということもわかりました。いいスタッフは「普通のおばさん」に見える、ということばが印象的でした。



コーディネーターの福川先生からは、『ひろばやスタッフが、いろんな社会資源・地域資源と「顔」でつながっているということは、何かをやる時にとっても大きな力になります。どういうふうに「知っている」かも大切になってきます。地域にいか「顔」でつながっているか？子育て支援拠点がそこだけで終わらず、周りにいる人に関心を持ってもらえるかがとても大切なことであり、「ひろばをどうするか」ではなく「地域の中に広場を位置づけ、存在を示していく」ことが必要な段階に来ています。虐待も増え、今の子育て状況は困難さも多けれど、その中で子育て支援拠点事業は、一人でも救えるように、私たちのアンテナ、感性を磨くことがとても大切です。自分たちが引き受けるだけでなく、社会全体の問題として色々な資源につないでいくこと、支えていく力量が必要です。一人ではできない大きなミッションではあるけれど、チームを組みながら、子育て支援拠点事業が、日本を「みんなで子育てしている国」にするための拠点になるようにしていけるのではないのでしょうか。』と総括していただきました。



○プログラム4 終了挨拶 16:25~16:30

●NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長 奥山千鶴子

「いま、日本は子ども・子育て新システムの制度化に向けて大きく動こうとしている段階です。幼保一体化ばかりがクローズアップされているけれど、この事業がどう位置付けされるか、すべての子育て家庭の基盤整備として重要な位置づけになっていきます。私たちは、一番親子に近い立場として、もっともっと大事な役割になっていくでしょうし、視野を広く持ち、行政と一緒にやっついていかなくてはいけない大事なタイミングです。課題を抱えている親子にどうアプローチするか、スタッフも変わっていかざるを得ないこともあると思います。こういう研修の場にぜひ出てきていただき、この事業を共に高めていきたいと思っています。」

尚、会場からは、子育てひろば全国連絡協議会の専門アドバイザーでもある新澤誠治先生に感想を述べていただきました。

「保育の専門家としていままでやってきたけれど、ひろばの専門性との違いを明確に感じました。「ふつうのおばさん」という言葉がありましたが、これは「良質の」ふつうのおばさんです。その「良質さ」が私たちの課題でしょう。私たちはひろば事業の開拓者であり、みんなで苦勞をしながら、



築き上げて行く途中にいますが、今後は、もっと、支援する人たちの社会的地位を守るための処遇も考えていいのではないかと思います。社会的に子育てをしていく時代において、「私にできることはどういうことだろうか?」「何か出来ることがあるかもしれない」と自らに問いながら、社会的に認められて、きちんとした処遇の中、安心して新しい社会をつくりだしていく役割を担っていくことも必要なことだと思っています。」